

## デンマーク語の呼応について — 英語との比較 —

今 井 光 規

デンマーク語では形容詞に性・数による語形変化があり、形容詞は、主格補語として用いられた場合にも、ふつう主語と厳密に呼応する。たとえば次のように。<sup>(注1)</sup>

En rose er smuk. (= A rose is beautiful. )	Roser er smukke. (= Roses are beautiful. )
Rosen er smuk. (= The rose is beautiful. )	Roserne er smukke. (= The roses are beautiful. )
Et træ er grønt. (= A tree is green. )	Træer er grønne. (= Trees are green. )
Træet er grønt. (= The tree is green. )	Træerne er grønne. (= The trees are green. )

ここで参考までに、屈折の豊かなドイツ語と、それが高度に単純化されている英語で、叙述形容詞がどんな状況にあるかをかんたんに見ておこう。まずドイツ語では、中高ドイツ語の頃までは主格補語の形容詞を強変化にした例がしばしば見られる(*der man ist guoter* など)が、今日では「種類」を意味する場合(たとえば *Diese Äpfel sind saure.*)などを別として、一般に語尾をつけない。<sup>(注2)</sup> 英語では、屈折語尾の消失により、形容詞は今日ではあらゆる用法で無語尾となり、主格補語の叙述形容詞が文の主語と性・数・格で文法的に一致するということもなくなっている。しかし古英語では、叙述形容詞は、すでに無変化無語尾のものもしばしば見受けられるが、主語と性・数が一致することが多かった。初期中英語では無語尾形が盛んになり、やがて専らこれが用いられるようになる。<sup>(注3)</sup>

このように英語とドイツ語では、今日では主語と主格補語の形容詞の間に呼応の現象は見られないが、デンマーク語においては前述のように厳密な呼応が保存されている。

ところが、あるデンマーク語教科書に次のような文が掲げられている。<sup>(注4)</sup>

Lægen	siger, at	tobak	er farligt	for	[ dit helbred.
(= The doctor says	that tobacco is dangerous for)				(your health.)
					dit hjerte.
					(your heart.)
					dine lunger.
					(your lungs.)
					din økonomie.
					(your economy.)

Lægen	siger, at	[ for lidt motion	er farligt	for dit helbred.
(= The doctor says that)		(too little motion)		(is dangerous for your health.)
		for mange cigaretter		
		(too many cigarettes)		
		for lidt søvn		
		(too little sleep)		
		for meget spiritus		
		(too much alcohol)		

これらの文の従属節中の主語と主格補語の間の呼応に注目していただきたい。主語はそれぞれ、tobak, motion, cigaretter, søvn, spiritus であり、補語は farligt である。

これらの語の性・数を調べてみる。デンマーク語の名詞には「共性」と「中性」の二つの文法的性がある。それぞれの不定冠詞(および単数の既知形語尾)を用いて、以下共性の語を en-word, 中性の語を et-word と呼ぶことにする。次にそれぞれの名詞について括弧内に文法的性と複数形を示す。

tobak (en, -ker)  
 motion (en (, -er))  
 cigaret (en, -ter)  
 søvn (en)  
 spiritus (en)

形容詞 farlig には(原級では)三つの形が可能である。

farlig 単数の en-word と共に。

farligt 単数の et-word と共に。

farlige 複数の語と共に。(又は den, det などの語の後で単数の語と共に。)

したがって、上記の文はいずれも呼応の規則を破っていることになる。つまり tobak, motion, søvn, spiritus には farlig が、cigaretter には farlige の形が用いられて然るべきと思われるところである。この場合、たとえば次のように主語に et-word が用いられていれば問題は全く起こらない：Lægen siger, at for meget øl er farligt for dit helbred. (ただし、この øl という語は、具体的にグラスやビンに入ったビールを指す場合には en-word として扱われる：en øl (= a bottle, a pint, etc. of beer) (pl. øller). cf. en flaske øl, et glas øl.)

上記のテキスト (K.I.S.S., IV. 8) は会話の集中訓練用の教科書であるが、筆者はこのような不一致を含む文がどの程度容認されているのか、又そのような不一致はどのように説明されているのかを知りたいと思い、この教科書を使用しているデンマーク人教師 (K.I.S.S., Copenhagen) に、特に mange cigaretter を含む文に焦点をあてながら、これらの点を質問してみた。答えは次のようであった。

- 1) これらの文はすべて正しい文であり、話し言葉でも書き言葉でもごく普通に使われる。
- 2) 単数・中性の語尾を持つ farligt が用いられているのは、主語が物質名詞、あるいは cigaretter の場合のように、物質名詞的ないしは集合名詞的なものと感じられるためであり、特に cigaretter の場合、特定の又は個々のシガレットを意味しないからである。

この答えはほぼ筆者の予想した通りのものであった。そしてそれなりに適切で便利な説明のように思われる。しかし、これらの文が形式上呼応の規則を破っていることは明らかであり、また特に mange のような数の多さ(複数性)を明示ないしは強調する語が主部中に用いられ、しかも単数・中性の形容詞を主格補語にもつ文を筆者は以前に見受けたことがなかったので、一般のデンマーク人がこの種の不一致にはたしてどのような反応を示すかを実際に略式の調査で調べてみることにした。調査は筆者のデンマーク滞在(1982/83)中の余暇を利用して1983年1月から3月にかけて行い、身近かに得られた人約50人(コペンハーゲン大学英文科他の学生と教官、およびその他の知人たち。20歳前後から65歳位まで)を対象にした。<sup>(注5)</sup> 調査は主として口頭で行い、書面による質問を併用した。すなわち、まず「次の文は文法的に正しいか、自然な文か」と言ってから、上記の文を読んでもきかせ、意見を言ってもらい、その後で念のために書面で同じ文を見せ、もしあればさらに意見をつけ加えてもらうという方法を用いた。

調査の結果：50人中ほとんどの人(42人)が質問に対して、これらの文はすべて完全に自然であり、変な感じは少しもないと答えた。しかし、では主語と補語の呼応に問題はないかと改めて質問すると、それら42人の答えは次の二つに分れた。

- 1) 約35人：確かに文法的には変則的だが、話し言葉でも書き言葉でも全く自然で、ごく普通に使用できる。

- 2) 約7人：話し言葉では全く自然な言い方だと思うが、書き言葉では、少なくとも自分は使わないし、見かけたこともない。

質問に対して即座に問題があると答えた上記8人のうち、5人は上記(2)と同じ意見であったが、残り3人は次の(3)の意見であった。

- 3) まちがった文であり、話し言葉でも書き言葉でも、使ってはならない。(farlig, farlige の形にすべきである。)

結局(1)の意見は35人、(2)は12人、(3)は3人となり、(1)の意見が圧倒的に多いことになるが、この種の文の許容度にはどうやら人によって、また言葉づかいのレベルによって、相当なちがいがあろうだ、というのがこの調査結果から感じられる印象である。

ところで、上記の文と同様、特定の個体を指すのではなく一般的な意味で用いられた次のような løve (en, -r) には規則通りの呼応しか認められない。

Løver er farlige. (= Lions are dangerous.)

Løven er farlig. (= The lion is dangerous.)

(En løve er farlig. (= A lion is dangerous.))

しかし、あるデンマーク人学生によれば、次の文 [a] は、それが [b] のような意味になる文脈があれば、たぶん自然にひびくだろうとのことである。

[a] For mange løver i et hus er farligt.

(= Too many lions in a house are dangerous.)

[b] Det er farligt at have for mange løver i et hus.

(= It is dangerous to have too many lions in a house.)

筆者が前記の文について一つの可能性として考えていたのは、まさにこのような考え方である。すなわち、for mange cigaretter は、複数の「物」を表わす言語形式を持っているが、実際には、一つの句 (phrase) に相当する意味内容、すなわち「あまりにも沢山のシガレットを吸うこと」を表わしているがために、単数・中性の形容詞と呼応できるのではなかろうか、ということである。つまり、前記の文中の tobak, for lidt motion, for meget spiritus, for mange cigaretter はいずれも、意味内容と言語の表現形式が正確に対応しておらず、「現象」、「事柄」を表現する言語形式の代りに「物」の表現形式が当てられたもの、と考えることができないかというのが筆者の考えである。これはちょうど英語で、

No news is good news.

Too many flowers in a vase wouldn't look nice.

I have caught cold because of an open window.

などにおいて、下線の部分が、言語の形式通りに「物」を表わしてはならず、それぞれ「便りがいいこと」、「花が多すぎること」、「窓が開いていたこと」のような「現象・事柄」の表現として機能していると言われるが、<sup>(注6)</sup> 本質的にはそれと同じ現象ととらえることができるのではなかろうか、ということである。英語の例をもう一つ挙げておく。<sup>(注7)</sup>

A person is considered peculiar if he anchors a slice of bread firmly on his plate with his fork, butters the whole thing with his knife, and then cuts it up and eats it with his knife and fork, thus avoiding greasy fingers.

この例では「あぶらで汚れた指」そのものではなくて、「指があぶらで汚れること」を読みとらねば文意が通じない。

ではなぜ句、節、抽象名詞など本来事柄・現象を表わす言語形式の代りに、このように物を表わす形式が使われることがあるのかと言えば、前者に比べて後者の方が、ふつう短く、構造も簡単なこと、さらには英語が名詞構文を好む言語であることなどがその理由であろうと言われる。このような簡便さから生じる表現の「ずれ」はもちろん英語以外でも考えられることであり、前記のようなデンマーク語文の呼応の不一致はそのようなずれの存在を知らせる指標の役をはたしているのだと言えるのではなかろうか。デンマーク語の場合は、そのずれが英語のように完全にずれてしまうのではなく、補語の単数・中性語尾によってそれがいわば途中でくいとめられているということもできるであろう。

前記のデンマーク語文で、ずれが従属節の中で起こっていることも注目に値すると思われる。もしもこのような複雑な構文(従属節)の中で意味内容と正確に一致する形式を用いるとすれば、従属節はさらに複雑な構造になっていたものと思われるからである。このことは、筆者が調査の対象にした人々の中に、書き言葉よりも話し言葉でこの表現を認める傾向が大きかったことと関連づけられるかも知れない。なぜなら、話し言葉の方が書き言葉よりも一層簡潔で短くなるという特徴をしばしば示すからである。

前述のデンマーク語文の不一致を、主語が物質名詞的・集合名詞的であるためとする説明の不利なもう一つの点は、for mange cigaretter の部分を次のように、いくら具体的な数値の表現に変えても、同様の許容性が得られると思われることである。

Lægen	siger, at	$\left[ \begin{array}{l} \text{flere end 20 cigaretter hver dag} \\ \text{(more than 20 cigarettes every day)} \\ \text{40 cigaretter hver dag} \end{array} \right]$	er farligt.
(= The doctor says that)			(are dangerous.)

以上、きわめて不十分ながら、デンマーク語の不規則な呼応について、英語と比較しながら、一つの予備的な調査と考察を行ったわけであるが、機会があれば、できるだけ多くの用例を集め、ど

んな表現の場合に、またどんな文脈、どんな言葉づかいのレベルで、このような文法的不一致が容認されるのか、もっと詳しくかつ広く調査してみたいと思う。さらに、このような不一致がどのような歴史を持つものであるかについても、筆者は今のところ議論することができないが、この点もできれば調べてみたいと思っている。

#### 注

- 1) Merete Biørn og Hanne Hesseldahl, *Huset i Mellemgade* (Akademisk Forlag, København, 1973), p. 14. (デンマーク語文のみ)
- 2) ドイツ語については相良守峯『ドイツ文法』(岩波全書135), p. 72参照。
- 3) K. ブルンナー『英語発達史』(松浪有, 小野茂, 忍足欣四郎, 秦宏一訳)(大修館, 1973), pp. 412, 437-8参照。
- 4) K.I.S.S. の教科書 (København, copyright S.A.C.), IV, 8, p. 70. (デンマーク語文のみ)
- 5) この調査は余暇を利用して断続的に行った関係で、人数については合計1～2名の範囲で不正確なところがあるかも知れないことをお断りしておく。以下およその傾向と考えていただきたい。
- 6) 毛利可信『数理英文法論』, 1967, pp. 15-17参照。
- 7) G. Doty and J. Ross, *Life in the U.S.A.*, Seibido ed., pp. 8-9.

付記：小論のデンマーク語の部分に関して大阪外国語大学の沢田里枝子氏から貴重なコメントをいただいた。記して謝意を表したい。